源氏二十卷抄 七

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

源氏物語抄卷第七

目録

繪合
松うせ
うせ雲

857-118
帝國圖書館藏
昭和十五年入藏

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

絵合　十二　以訪為

指遣代詞書よりの子内親王後合乃事しみしらを解合双

紙に根になと皆をもつて詮とさり源氏物語三月也

澪標巻とは是との中ふ廿九歳のるすあなへし

うん秋文　朱雀院御時撰子女王　重明親王女

天慶元為秋文後天暦為内侍所歌文女二歳后門

十三戊へ内十二月廿九　春月一回長月也　ぬしはんねの絵

合わ遣へ内侍不定

中宮　中宮なる文間へ道文と云りぬ可中事ふ

わ〻秋ともなり

ちなてよろ　源氏物語中うや

二条院より二條院へ入内とれかーめせゐを院と揚て
なる也
沸ぐー　櫛箱　中箱　香壺筥　ひつぐとすきてよも
硯を左之　打みしるの箱ハ　ゆしるまの物あおうこ
ゆれかすとす調事や　中ハ錦かーてもきをよく蓋
髮の具なれをあはるを
香壺　梅花　荷葉　菊花　海系　皆可入用の
百歩　百歩一歩ハ六尺　六十丈をくもといへり
ゆゆれをみるこのかと　大やうなるひの
年の時ハとぐーとにあるて
ひを　ひ巻　故文の額ゆ　ひ入へ文取きーゆと

ゆく　ひ巻を櫛ハりゆるなり
銀なとうて松枝又鶴ゆ紙作て糸結付るなり
紙折ゆ委　櫛ゆしの表ゆ　浅ゆぬちきりもを
白ゆひ巻を向の折ゆもるへうるけゆ
別論ゆ云　朱雀伊坂へ故文ハ下ゆ時二なひ糸のゆへ
おもむきゆ　ゆをゆしゆ　ゆこ作て壺中と称や
ゆこあゆしとよきを作へをとぐーや
作法しゆ　作書信の式を大ゆと作法して書ゆと
ゆく見作ゆなるへゆすす
ゆてれたるひめ　冷へ無作ゆ事ゆ
ゆゆしやもなりゆ　諸名ゆの事ゆ朱雀と揚ゆ

約ひきるゝ事
とそうるとそ　たそらくなり
又はせうとそ　朱雀ものは法文をる
いとあはきき　源氏は也事なくて年計をるや
をゝはしり　あさくとなくともとなり
いかゝをを　大極殿(ダイゴクデン)をそれ事也渡とおやゝ法ひし
事なとをかへし朱雀院又戊子(ツチノエネ)の所之所をいてをり
は息所と同集(ドウシュ)るとの事をうをつねをなり
わうとそれ　うをりて今うを祝言(シウゲン)ぶし事をれ也
とはりや　双
院のこあうを　源氏はひなるを

内をきこ　は年齢　はさ(サタ)せをれへし
おくれ事とはく　歌文はひをはりをや　今へ　年はをは
事はもりうをやゝ　哢
ををの宰相　条議(ヒョウリノイイフカナ)をて法理大夫(ヒ)たるなるを　雅(ヒ)と
もを　一人の
ゝ女房　は息所乃御産をし時ゝ可懸をし所をや
あくれ　六は息所の事と思ひ出をる人を
をゝうを　世上をはやうなる人を縁(ヒ)る所となり
中　文をと　常を二条院をうり
文を　清涼
人ををとをを　年れ園(タ)をゝをを町　まうんと内ゝ

おぼしめすへし
きうのかう　秋好むちいさきたるへし
さたてん　殺仕（セツシ）の方の法（ホウ）
あなたうち　弘徽殿（コウキデン）秋好を梅壺（ムメツボ）や
權中納言　右の大中（ウチ）なりと思ひ給へ
秋好（アキコノミ）の内とをきゝつけ給ふ
うの法　院へ源
秋好の事　紫の御方（ムラサキノオンカタ）に仕（ツカ）へ給ふ人　又今も仕へ
給ふ　とかくへとれかめ
れとくを　源も院の御心中　さかの上さを
世いとをかなり

めてさしと　源もいまゝ秋好をたのしと思給ふ
又ものゝ思ふまゝに　遠くの御ぜをいとのなるへし
ゝるゝあ
共アリ　豊乃又法（ホウ）好（コノミ）と入内の事　勅宣なりひ給へ
さわなり〳〵　潢（ウスクモ）と一つ
ものゝ
二所　あたてんと梅壺とをる
うへ　廣徽（キ）宗黄帝（クワウテイ）絵の及（キウタイ）
聖後　舟自撲（コヨタウ）　及身をわり　身の
立上（シヤウ）たてゝ　盛（セキ）
海　秋好

筆うちやつて　秋好中

いまーめく　紫の門さめなとするうしや

月のうちは　年中行事ときめて書うる近代まて沙汰

重寶なくあるとや十二月乃乙事と盛なる

又こなたなる　あれてんすそなり

ひやとくも　法門へむしくもんせ法をあるや秋好うと

へりてわうらせ法をんのうとてるる

かやまー　法門をなやまさんと源氏詞

女房　紫上　敷うり　姫うきを二条院より

長恨歌　五昭君　揚貴妃　馬嵬ーてうーおそれ昭

君ハ夷狄とつうり　きー様ありあ

東夷　西戎　南蠻　北狄

ことのいを　祝すへきわかーなり

こだび　みとよむしし　山度や

のたひれ　次ア　そうるる

法ひふのくらていれみん　一向ーしきれ人るるとも

あるれなるーし

とうる色し　紫うー　後ひ元

ひとりゆくこの　紫上の次麻の巻のうをは元も書ふとみ

四されとも今もこの元紅ひてひくうるん法へるとも

ひうてなくさむへうるしー物ととや　ひうきれ

うえめみーこの　紫のかなーみ法ふとそとふやうるる

なみてうえれや　はそもせ行へる
中文はりうもやむ
うこと　をそれまうとと云むうや　家まて給合乃事
書出きり
ちをりか　一指行くるれかをすうか白ちうとうる
ほらひれ　正月一日より二月を法花の祭三月天子れ
はは乃月うや源うりをとも花集や
梅壺か　秋ぬ
りすめのーき　奏ーぬうこれ
とよなくまさまり　弘徽殿の勝るる　梅壺乃をもも
事や相続を回今免町ーきやのて月をうきとも

ととりするよや寄も又世やとーへるあてり
たみきと　右梅壺　右弘徽殿後命を二度や　初を梅
壺ーて立上れと合ふへる後乃を殿ーて梅壺を
うれてんとあをせたをあり
をいかりーのをけ　天徳の合るを文安典侍尚侍
食ぬなとあんたるあーのはを合ゆをの例ーや
ゆううく　事かうくたりちをを撮と云う
うあうりれおきか　梅壺うこかり
行をのくや姫の事や　右相撲後者不云
たうとりとたをとりを二元方れあるたりこをを安か
れるや　男昭をたりうとりるをの業をうを見八

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118
ガラス使用

ゆくゑなるを一ぬ種乃大きを行を義行の中み
一中りてのひうるを中に三すはうり乃人あり三月
をてうを美人となるを肉ひのまりひをのをと興行
刺繍上衣 ゆくゑや姫と云付世界の知れこと行ずしし
をりゆくゑや姫云やう祈つくるのみをう人佛れ湯い
の祥を行人くうりられをこうう人蓬莱のみう銀と振
やう金とられて白玉をんうまあうれの
枝を行人と云こ今ひとをゆく虜のあく史聞れはをぬ
行人と云大病をうを結乃頸なるゆれひらはむと
をて寄へと云をくうりうのみこを集て玉れ枝他りて枝
てゆくうをうを玉れ枝の録とうつの言葉をうをれる

玉乃枝と云てうをしつか大臣殿隠れれりをを虜の
まけと云人ゆ金とはうりて買うをうるうや為をを
をて史うへぬめらくくと焼ぬうれうりあを
と云詞をきりけるひゆ人行をとけを成ぬ下略
義乃中又略之
うつや 此他 あれてんけ国へ遣虜使ゆ成てうんか
まうう柔て琴なとうく弱うるみや
ゆくやひめ 月及をゆ鷹義をていゆ詞元
を方ゆ云や 方人市の詞なゆし
やりひけかれる 蓬をうう天上をうるうや
りあれ日ゆり みりとうをめせをを新きりなり

女院 姓 おぼしめしたる時の大臣や
史胤 宗叔 云 彩雲不出 寒史胤不 寒
かくやはのそれうるを可覓 花の委
嘆かも大ひめ也
ゐハこせ乃 こせ姓 お見 若金冒之子と云
金冒寛平の時人名其子別可為 賞之同時や 私勘除目
成文抄云 撲渡史月後八位下巨勢相覧 冒 昌泰二
二月除目執筆時平乙 嘆 時代うくあふやはお遠
うしれ文をそ 唐綾裏打ともうむ
もうんのちう 営檀也
やうのを 十二三支の時遣唐使 渡新國 至琴
声琴引者也 阿波羅琴とつくりめてし事あり又波
斯國にいくさに 栴檀木下琴 也
色と羽付なゝぬ者とぬゝせ天地とうせ也
りきる時 唐へ一引ゝ引やは
ぬきみけりみちり 左衛門小志 元多井部常刈 おゝ
歌道用
業平八 屏風 書 紙 道用と云
ひらをにを理ゐ 右勝也
正三位 相撲乃 赤 及 右方也
平内侍 左なり
伊勢乃海代 伊勢物語 とりひ者たんを 曲 ゝ

やをんなは不云しとかり
ものうらへ事 四三位物語の中みうらめ弱也
伊勢海と云ひなり
兵衛の大夫 知ぬ人なよむ 山詞 三位なる人
指遣侍者小大夫と云 主殿親王めや 王氏と云り
文 落書の伊勢とのゝ事を勝と定給へ
みるめしら事 うちとくも せうとへ ら相撲なれやも
ひりのうこをやせうえ給へ尼ゝてまいりをしを
めゝめうもとや 指壺より出られを伊勢代事畢
ゆもあゝすれ云元祝お遠れ
うへのを文乃も 内と秋文とかり

初度は絵合を秋と内となるてし
れまへうくうの 立上の法華すくとるを
天徳年 合と摸をり 左右相撲合勝負例
朱雀院菊合又寛平 永承六年内裏根合 祐芳門院
歌載合 寛子皇后宮扇合 上東門院菖合 四子内親
王絵合ホや 山対の三合よ金まゝに 相撲
見わくをを波乃をゝみ物語てゝり外義ちけるを川
代里
ををとゝ 源乃うこをとき法ひややくるをもやや
行海を一ゆゝて今まををゝわけ
むとを行弟ねをまれ弟ゝ

紙繪　皆そ　絡（キヌ）て書

院おも　朱雀ゝの状好へ　やれりもなくぬひ　ゝ

ゝのうちに　年中　節会（セチエ）乃ゝの

延喜代ゆてつゝ　ゝ　ゝ　こゝ　ハ書　ゝ　行へ

桐壺よりする　ゝ　ゝ　ゝ　桐　ゝ　延喜　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

宋ゝ　巨勢ノ金岡　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

と申奏するみと云事乃詞ゑて禁中のまと可申ゆゑ
れとも　双紙判官ひ〳〵叡山の次ゑ乃うゑめれ
ろ〳〵や皆双
院れ申給　朱雀院申ゑ恵后の妹宮ゑ乃叡山ゑ推中
のゆ申へ申給へしとなり
内侍乃りん　勝月抄
うの日と定て　三月廿日あまつゑ梅壺と弘徽殿とのゑ
あそせなるて
ひさつゑみゑ　右梅壺　右弘徽殿西向ゆ北南た
みたゝのさゆらひ　壱盤所と云り男乃侍殿上のり
梅家なゝて壱盤所ゆまく申給ふ

以給会乃申蜜米を天徳四年三月廿日内裏ゑ合せて撰
して書ゑをり清涼殿乃西の庭ゆてありし事　壱盤所
数緑端畳四乙弾琴後源没簀子四巻　西文記
の見也　上の申さなり
右ゑ〳〵んれそて　天徳ゑ合右方洲浜萱草擡机蘇芳下机
萱草地錦式
今年右ゑ絵を萱草擡乃絵ゆ入て蘇芳ゑ〳〵地ゑ花色
ゆゑて又下机ゆて〳〵ゑ数物を萱乃〳〵れ錦なり
打数を机とすへ〳〵ゑ地数乃〳〵やゑ〳〵ゑ蒲萄染乃〳〵
侍元天徳の時代例演を花萱擡蘇芳ゑ〳〵つくれを萱の

綿と此一文とをり花を机の足乃顔(カラヒテ)されの
色打一文と重て又花机をしひて又猶と一きてきて
絵と重りり
わらべ人　色なとをとしむへき用也
あの文ま掃りさ袖のうぐさ行秋　あこめ　袖
行秋童のうへにきる猶也　ホテ乃うえのやう成猶也
茶文(アカイロ)のうりたる掃まのうさ紅葉うさ紅(ヘニイロ)袖也
袖を二まも云まもうさめるうりや葉のさ紅を面薄紫(クレナイ)
萠黄(モエギ)と云
たをりんのをこ水　色濃き合た方例淵沉(チン)机浅香(センカウ)下机浅(アサ)
漂字(ヒヤウ)文織猶此数　今案ん赤絵を沉の紙にへらを花足

を今光のしくをしくさる由みをとらを何まをて他ふる
ををみをを浅(センカウ)を沉乃浅(アサキ)と云下机と他をりおしをを
下机をりり此数(ヒツヅ)丹代(ニシロ)乃錦(ニシキ)　足ゆえのくを花
足をとりしみをくををいふや　下略花ま委
ををりをを文ま
仍当あをめを紅花俗(シヤ)家を多文花　柳を面白
裏(ウラ)をきと云り文を知花と色文をいふへし
山吹うさ称　面薄(オモウスキ)紅裏(ウラ)黄(キ)乃りを花山吹と云　面黄
うを紅乃ををうを山吹と云　時
此文ハ　ハをこ戸錦乃ハ唐詩樂(ラク)乃装束(シヤウソク)と明をやうと
云こ不入ま乃なりを紀付　此花可見

れきへうの文たち 畢竟
うへ代や房 典侍 掌侍ホリ まへうを 海へたた
たつとへうた帝文書文のをわ不蒙ときこえへし
をれ日うちの文 蒐英ヲ 源氏兄弟 今日の判官也
うこをかきり こまみ 如くてゆたうる浦山水昼り
をれうや 弘徽殿れを なるを
拾遺第九詔書廣義ヒ紙ヒふ馬ひけうあり
人のひよ絶たて ひ〜ふをれをり筆上をて
を大事とやをこき内ヨ書ヲ をれを定ヲ筆方を
不人の上手れ書れを古筆やもれとらねとなるへし
あきうれい 清涼殿とて〜ふるうあをひるを御簾と掛

でうや
ふかう うをこをこを別とれりふ不白 ふよ笑て白
たハれるすのうを 前負持ちて金銀の数枝を測涼
をるをうをこ乃前にをて荒枝をてうす成をや彩
一あるとこいをやれ勝のうす一あるう又次ア の奏
出来たるとなるを
ちうてお ちうれの中ふれちうをあ文ヲ人ヲ
をしし又をう乃りふ不手なの文をう
海別のをいし紀 回回記ふとのやうをるを紀とうや
をく 別乃事れををひとなり
たのうに 天満宮会れ勝

猶ひとわたれ　次廉の志うなんく
いとけなき源氏
院はく　桐壺
つれちさいたひ　顔面不華短命死
支芝と令和遊秘なる色一
弱たかく　弱もたかく支学を人工おとらぬ能なんく
ちのこ学文も至用とふや令とさなく　ひかりときと伝称
ごくとや　ちんさいや支を世法政事れりこ計をよ
くもこ一へ弱へ一ふけくもなくを又をくれたるもの
なるまーとなり
筆乃行のきり　ひ行とも筆うを必るとろや

かうをきくくしを　すを乃志をを見せなれ事をなり
行れたるも　神文の討也
碁うつこと　東坂三不経酒ト　碁ト　高誕
遊仙屑云　園碁出於知恵
をまをの　わろのなる猶るを
気乃あの中　古家れ人へくを学好人れ支あ所となり
る位をを　源氏ををーしてるを
文さい　そんちいを上の藝をーみをよを誌道を
遊しをあや　小を左大臣信ひふ法してるを
ふやうのこと
まきるれ　つくくうめたれ討れ

廿日あまり　繪合　前のを　十日はなりて
こなたこそまさ　西向の御殿也
みんのつりさ　書司　女官也　和琴あつの琴也　先和琴
とつりさやうのやうの　樂器のすとてうふみとを
李夢王記承平四年　彩雲金物　書司唯　祈仏　御手
奈良之万葉　礼書　即取　和琴名　通之御前
今案抱琵琶之後必　抱琴　書司和琴　のさとるゆへ
和琴をふんのしらとを　ひとる和琴乃ゑりや　打也　多法師
ひとりへと　源氏よ次也
うへ人　殿上人　琵琶馬　うへ人　拍子　とるすと
助音　元徳年合　御歌
遊雅信　拍子　抱琴　云
又りさねく　あて　禄　とる　なり
うのうへく　清涼殿　世　あへ　あへ
光りもの　光　琴乃　光　次第　又みを
こんとなり
りうをて　源氏　掃部　あへ
うへの　むし　御門　弘徽殿　也
この時　世のとくさふ　延喜天暦乃聖代　云
あ〜をり　冷泉院　天暦　法師なり
繪合天徳　合也

れとも　源氏

ものしれためしなり　史記云　大名之下久不可居

後漢書曰　彼功多賞厚　多令怪功成名遂身退天之道也

君必衰也　おそるる

世の中　天子の文をもてまいまする

たのもしこそ　命と幸と張華よりひしに叶ひ

第事可思之次第乃事　あるや

御たうばくらせ　さうの世界のすがた

松風の意　世をうらやましこそ

表れ　夕雾を安年又的石姫もいとなんとや時

ひとえ　双

松風　今年詩をもつて巻のなをきり

源氏物語　絵合同年秋うるうや

ひかれぬ　二条院乃東院蓬生の意　うの他を行ふ

ゆかり

西乃たい　白

海和　政和を内これをもつて司和元　又家司を次ぎうや

ちんてん　源休息和也

礼記曰聘則為妻奔則為妾注曰聘問也　妻之言齊也

礼見而則得与主敵體

妻之言接也　言得接見於君子不敢与主敵體也云

聘也礼通也　奔ハ媒ることなくして聖合乃体也

ゐれて紫上に対面し給へ仍寝殿に不参せ給ふ故可然
六条院にも紫上を寝殿にとゞめ給ふ
悲中素心也
あんとうとうきこえかはす　源氏くわうこうを思ひ
てまゐりて身の穢なりぬること我れもなり
ひさしくみも　五月に法華経上法ゝ不所事となり
給ふ　前の尼乃祖父中務宮の　醍醐
法子　前中書王兵部卿親王号小倉宮法してゐ給へる
きこえ給へる　雑事也　あまりくさくさしとや
すまし　法理
こえ給ふ　兵部卿宮法してなり

樓殿観　軸乙山法　後小寺より成寺清涼殿の内東北の
泥陀宮也　法橋上人斎院中一院釈迦堂建立と云ふ
御物忌ふかうして　けうとくもあるかとこゝろぼそくてのみ
心可強きこゝろも起こゝろうゝ中や
をれつゝ　ひとれすて法くきいかく
をひく　退也
こゝろ　ワの心退すてをゝ一とゝろ
かこうの　のこくゝしてあ所赤也
法ゝう　法花
民ア大捕　兵部卿親王乃長男中納言伊勢門通の文
の法るれを行ゝる文の他をきゝと法華しようさえ

のりて夜とゆ一文あるとて仏系たるるを
蒐裘賊免と云字よ加さらゆへ　ときうそ曽の國
の不乃ゐやたゆ結ふときうと云そ引あもらんと云事
ふ云く為明迫求れむる定俗行人を銘人乃迄う也
人あふと云ふうたそり　は俗文ふ禁白あり
蒐裘賊云　余魚山之下部ト鵜若歌解官休勿孤老於山
遠若裘之漸成為執政若狂仏陀　元慶長諂之屬二十魁
ト略之　又若位財を求地なると楽文作行人仏詞魚山
行五水とあり俗たき為るに勝たき水出るを如山銘仏
ものあつーとなり
いなにくれ　つれなくこりれ行ふと云心

さらふき　搬拯れ　さらうーひするむうや
うそをゆくと云ふ人不及　仍蜂炎も用行人を
くん　券へ　又書や
いたーきこ　ぬるうそうさらを行をくゆ文なとみい
くとなるしめをなり
ふのくの　大井代事ゆ中上を
いろひけうきうる　文あけうふむの
海つふふ　ぬるう俗ふるや
うーなうきを　てん移んのむの俗語乃うーなうを
ふ云をむ和遠のゆくしさふふのむと思ふへさうや
私ふーうれるをようーぬむのぬむ可見うーくふ

くつろぎたれと云ふ事くさまそゝる
ばくらせ給へる御堂　大きゝられ南ゝを拍震ちと思ひて加
ゝり　法寺也　鞠ひれ山庄也
花ゝ鮎ひゝをなし　溪流天皇若日果敢之地也
殿のひゝへなとはゝらん　果敢ゝとを大学ゝるゝあと
ゝゝ也　法橋遠　奈良東門
遠ゝゝを今ゝゝゝ殿漆せれちやくゝそ人をみるへの
をける　西ゝ条ゝ大きゝられ殿の石果院へゝゝさ
ばく近なく成と事て海ゝゝて奈良の方と思ひ出く
今たゝゝゝ孔とゝひしし殿漆殿乃ゝのたゝをまそゝを
ひゝなゝゝ

あ遠ゝ　大井意也
いゝゝゝを　労ゝなくゝゝをなとをなくしてゝ可心故也
家乃ゝゝゝゝ　源のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あらたくぬ今のつまの程ひろ事とをけくれもとひ
もうれ よ城うまおへきも余の限や
ひのき人 上り度ひ一人も亦の繁てうこうとや
よまれるに いくーそ見けーうこれ恋ーきう
浦山しくもう色なこうれのひなる
しい 門出乃時々そなりけり
あひうえん史記曰 尚る伊尹之聚熙車前後十二乗
楚王之后倭云人蛇の病と愈たるーお七すりむと
食て教真て忍と都ーきる倭伝むと海て楚王ふ献
ど夜中ーよ老る法明なる法華経之玉
沒収ふ 汁ひうりやく起らと

人道ゆもうれ知へまなり
ひうくんよ ひう拾ふ人孤行ふ色ひ人くーふうる
りされと言へ色たんぬ堪思あーふるとうや
を孫ともふ言 部をを孫ゆを出ーの今を養育とう
海ようんとなり
ひう浮ふう 源心乃浮たるを思へる
いうて又言 明石上 へ道ゆあうんことをいひてとや
とうれふお 入色を遂うりとぬる上のひうるる心
ゆなり
世中を 入道経 ゆとを中ーおるるをしの世勢を思ひ
てなをあてなりるもーのとゆ世下ッうるとや

人は國　伊勢物語のひの　他國とうりて
身のいたつらなるを　愛敬ふまじきや
おやのいのちを　親たるべや
孝經云　風興夜寐　毋令亡身不所辱也
注曰　當風興夜寐　毋令德行業有辱其父母
をもて　をもはいとうとおりひしなり
えのなりく　明石の上事
けしきなりし　品貴不凡にて　如錦被覆
うれしく　源氏のるや
世にてしへ　道隔なと思ひていとり
中ノ宮を月ゆきあるう

山かつの乃ひと　八道は心ひさん契こうさなる
天よりまる　ゆえ　会経天上欲退時心はす　大苦悩地獄
苦毒十八不及一　果報尽盡還隨三途
三途地獄　餓鬼　畜生　と三途とこと
阿羅加　四苦と云人天と六苦と
天上ふもさあく人のもとらく三途ろくるを
たとへてい人を京上をを上よりたと人を
生るり又三途のさろ事　一時乃ろりと也と可心は
一時に長生死乃苦の定とい人を
うらひそこめる　さまて入道討　我なく成とも後夜と
もめすなと云討なれやも六時ものれ死ると人ろ乃已

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

紙数とも　為家と云なをあり不用　お葉乃巻う

て歌作り

ひとり人も　なのくれ　あそれと云詞

なりくおもひ　なを一首のひん義なるか中ゆなをとる

但をつまりく　まう　但きん事いめくとなり

おりひ作きせを　厚乃くる歌れ　勾雲時をのこ思ひ作き

をぬ世中のうき　尼兎れひ中也

うの時よ　尼兎乾のうこをとうむきー絵とる事

つくる色り乗　張寒漢　武帝伏とて樗を乗て天漢乃

銀河　源を究　して　盃津より　盃津より牛ゆ乗て海

ーを思てよめり　舟いまこた乃こをあり物又浮本

を舟うるのこ町さくうるとも　紅梅孝よん

つくらねと云心ともつて盃津うり海心ようをあ所

新古今　そ海西ふ浮本ろうこうこうこうん紅葉の橋を

ちれやちらすや

ひとりうこと　尼兎れ　狩文乃事とも

きこ　大町こなりるる

海まち黄乃事　おうり紅葉と源氏うり紅葉はこうなり

紅海したこの子　紫上へ海賜と云うよ紅葉

中く　上海して中く和おなりひなり

海うこと兎きん　明石まて源の引紅ひー琴とうり出く

人きるれを心あおりる事

為とうるて京 尼君都へ上りしとき
とうるて京 松風をしのびあるとやは
不用色明親王なと心出るもし松風はりの君とや
かつらゝくたるゝとよそう
たつ水あ ぬる上 明石上をぬるのたつなへし尼君
そ給とたつやはりへけるを指給なとまや聚うをて
よめり明石とうして今あつる戒王〳〵人をうゑとあはや
源と給御分乃心あるれうや
中〳〵きれ心 ぬるを思ふしきりしめちゝそや
うゝにみるへゝさ 源氏ふ堂たて給と大きうに樓とこの
給うや又樓乃院源理の事まゝしまや 呼

うゝれのんとりふ而 紫上を楽間まて大やうふ仏奴
給へ王大井と給ふてや樓院を樓京院を太秦の色ふ
給へ〳〵私大井樓京院乃ゝを〳〵すうことりとを
色と宮もぬ源源一ふ色
奥の討ゝとゝふゝや樓院へと給て大井色へ給出也
れ給ゝえ乃へ 斧のゝへ乃ゝうるを又をけの色ん浮世
中ふの色らんも王晉王質ふ室山見数童子の囲碁ら質
一指の東様金を氣乃遠斧林桐尽既海を復御人
遠乃ゝへ 紫上と源れひとゝふゝぬとなり
世乃人も好色八今をるれゝゝ給とうて伊やの色と
ひと奥をり

四月の頃そ　明石さいこと源の氏物語といふり
大そのほう　夕霧
殿はよ　夕をかむりを太政大臣殿孫のむもとこそ
むくち　人うわも思ひたかはれる者なれとむへ山の寺
ふくるとり
伊勢道定の時十月より山に祭あり　松へ姫とりへる
物忌(カリハ)乃時もりへる畢竟(ヒツキヤウ)ふ来すくあん姫を家
あるふもいとさとなれ　大井の意
うのかいある　二条院の東院
ゆくろふへ交而　大井乃宿をりへる
樓院(カウロウノミヤ)樓交へ(ロウヤ)　樓交へ(ロウヤ)　大井へ

海のうとたる
うく此所ありたくすして位のふるはひとまるとや源氏
次ぎまくきはなとふしとを思ひ給へ
是大明(ミヤウ)も此理(ことわり)あるなり　哢
ちりの具　芝ちて尼君(アマキミ)と思ひ給へ
つとまろく　源氏詞とりのなる事をなくうなる給
を新念(キネン)を作りとるを
作すとのと　ぬ石をすてて内上乃ふを給る
又所ーとりへ　入る此事せ
まて作ー世紙　尼君(アマキミ)の詞し世へ　ちの色らんとを思ひ
なかまー物をとるを

あゝ後りをみさこのれ是後没うてぬれてうた
めひろふいきるういうを
ゝ
ゝさ弥れ拓も　ゝ世へんといたひときてしし姫宮の根
ゆゝうめて〜君をわすれを　訪ほうれ
但ゝくゝもし心遣用すへし
あさき根さ〜　母うゝよくもゝの乳服と早下也
ゝ〜なうゝねを　ゝくゝ〜れ心れ心巻ゝを今きて二
而ひゝ〜きやゝくゝ巻ゝてゝ人のゝく心得れ
みゝれ但ゝひける　遣ゝ親ゝ六ゝを穢出ゝゝを母れ
甲下やとなくゝめゝ狩へゝ言ゝやく
水のゝるひゝとのまゝう　ゝれ者ゝ狩ひをゝんた

ゝ心の　延喜三年八月十三日亀山の水神祭文ゝ
ゝ乃世まても小倉山の麓ゝゝゝと式記ゝゝ
ゝれ〜ゝ　尼天満ゝハゝ　かゝるれゝ
親ゝ乃ゆゝをゝて志ゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又甲下れ　遣ゝ我ゝ苔ゝ但ゝゝゝ
いゝ〜井ゝゝ　小野　日本記　ゝゝゝゝ
ゝ〜ゝ遣ゝゝ乃ゝ〜の面かゝゝゝゝゝ
尼天の神れ也者なれゝゝ長ゝ
心お遠ゝく可味の地ゝなゝて尼天乃年ゝ清水ゝ
ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝてゝれ　渓流のみてゝゝゝ

十四日又日暮日　十四日善賢(フゲン)十又阿弥陀(アミダ)暮日釈迦(シャカ)也

念佛三昧(ネンブツサンマイ)(ゼンゼンジャウギヤウ)三昧也

月のありきに　大井の音なりを聞て

ゐしし狩乃　ぬるゝて器へ事　おりひ出給へ

ゐるもゝくさす　明石ゝくも第(ヲヤウ)の弾と申給ひ事あり

まこもらへを　今乃拍子笑給へ　明石巻にこれ移うと

らゐほとゝかなゝすゝちきらせ給ひ　なり

契しかゝ　源こゝのゐうとらぬとあるゝ詞也

かりゝゝと云　ぬゐ上

ゐるとうゝしうれや　我なく高成ろへしるを　時

我身の宣るとのこつ山り山里代弾なりを

かゐなりらぬようを　源ゝ高なとゝ丸のよゝ事をもか

けなゝぬ程と双や

つゝまぬの迷うん　宣上代養(ヤウヒ)よみのとゐ程しのゝ

うゝえ打出給へるを

又ゐもうん　母乃てゝけるつゝといかゝとなり

すくせとよるゝ　ゝとのかる所と　双地

源代ゝゝまてゐゝゝまなり

あゝかも　大井音へや

里音ゝゝや　里音ゝうかせうとうかゝのゝをたゝ

もみ紅ゝ音ゝゝうゝん　えと案

もゐりか　宣ゝうめゝとの詞也

いつ〳〵白なと　母君をさしてなり
人々おそれをる
上をめす　上臈の方〳〵をとる
みこ　内親王をも云へる又と明石上をかめてのことなり
ちこそをりめつれ　ぬる上足洗人を
うびや　源氏の御　ぬるてをはせをとかをやきに
れうの方はくしきとや
あなうらなる　双
うのとけをを　解官せし　流人　ゆりの乃せう詞
色〳〵と赤白黒礼なるとや　白とをひろうや
紫門尉　紀伊守　荒海　良清　浦風独孫初
ゆる　暁　とうさう人もるれとたしきこと云詞也
所へたりむを　雅もをもの房の西巻
段拾　方をうと人をまをせれ弱こ　をの八重たの山
まやハあるぬ　八重の御をきれるや明石潟れ
みもなをらをとをう
松もむ　注をうを云人みをんる砂乃重も巻の友ふ
らなくを　慈不意詞みもありうる　祝儀とや
あよなや　をくれをると云詞　我も思ひるをれ
りをを次ぬるをまく沉　しなりひをあうとうを
めの海のをれと云　をを言　冠なを思し
とふや　良清と行事　大の御　源ゆりの乃せうの詞

まて可然元

今とはるゝみ　まてはさくいつなりは

はるゝ　ゆ兵衛猪　二人はさもなし

山はけ　ゝき　ゆ家といふくゝ面白詩や

何の一の物語　小弯前逢事と遂に歴ゝ武と伝やり

あまれ作人つゝ　まゆのるゆなる面

小弯ゝゝ　小島付枝れ事　数九ゝ枝乃下をし

さゆへて山蔭をゆうきゝゝ　まそ付や三ゝ付ゝ

まゝゝ和とゆひゆゆ元と山付と人へ萩ゆゝ

を秋清夢乃枝ゆも付元まと枝ゝ云事　西園院跡と記

ゆとゆ黄ゆゝ夕乳の巻ゝ夕良と枝ゝゝ

ぞん　元面むやもゆゝます　一献　二献なるゝし川乃

色醉中　危とゝ

後白　詩作ゝ成たれ面

枝を付ゝひ　ゆ拾也

きふを六日乃拾忌　何ゝゝを六日乃拾忌なるゝし

天上林六日作ゝゝふや

ゆのるれ面　勅言

月乃ゝむ方　ゆ使を院人の弁　家もあり　楓の院と

楓の里ゝそ面よめゝ　乃やけのふゝんを面白

月を付とゝふすゝてとかめゝゝ詩也

呉剛斫樹図陽雑俎月楓高不百丈下ニ有人斫之樹割随

合人は、異名剛西海の人学仙ふる竜譚（テンヤツリクタ）を、今所樹（ヒラ）
きりあ乃物　儲物（カツケモノ）被物（カツケモノ）かゝるのためは装束（シヤウゾク）と用ゐをり
りさとなりぬ　ゐ合たる物ゝとゝや
久のゝこの方　次討まくゝ西嘯　約束なとあゝゝ之あゝ
むとゝ山里は放物々旁よ之をるゑと卑（ヒゲ）下ゝゝや
約束あゝゝ之あゝんと　双　久方乃中みはゝゝ
里なんゝ之をのゝそゝのむへらなる
伊勢捷よ物けゝる時七条中宮乃やゝゝ之ひをる時の
ゐゝ事ゝゝよめり
ゝゝ孫の所ゝゝ物也　渋谷ゝてゝゝゝゝれゝふみゝは
はちの文ゝゝひを所ゝゝゝも

めゝゝ来て方　源面新はちゝゝゝやのなゝゝゝや
仍ゐ説　次磨（スヽ）打とへ彩ゐひゝを今や天下と掌（ヒチコロ）小れ用
しめすとなゝゝし
ゝゝ之ゝよ方　ゐゐゐゝ人のゝゝゝ月ゝゝ乃めゝれほと
ゝやゝ来ハ孫ゝ夫なゝんとゝゝ
ゝゝ大年　ゐとゝゐゐやもゝゝゝれゝもゝ
之乃ゝゝ人の方　右院の事をなりひてゝよ之ゝ
来めゝき震乃若ゝゝ明年のゝてゝゝ日は善しゝゝ
ゝやゝゝゝ
ゝゝゐをゝゝん　双
ゝゝゝおみゝはく　酒（エン）宴也

れたくも　まへ　に詞あるべき　管弦なりなどを
りのとも　大井　うめ　うをられ　と　管絃せ　へ
うなり
近衛殿の　今東宮節　と　云　を　殿舎人　中　に　遊
ふ　を　しら　ると　の節　と　称　を　其中　う　番長　府生　に
を　定　あ　ま　ふ　て　春日　祭　於　義　祭　れ　役　の　殿　林　の　東　を　近
殿十人　召　具　定　お　私　に　求子　殿　は　藤　と　藤　と　云　也　陪　後　を
府生　加　陪　後　も　近　殿　の　官　人　也　陪　後　を　和　琴　笛　に　役　之　賭　弓
に　撰　乃　大　の　選　あ　ま　ー　乃　は　も　皆　を　殿　を　る　ー　殿　の　役　也
を　か　神　楽　人　も　召　人　なと　も　を　殿　の　舎　人　あ　ま　を　つ　と　む　る
也　を　中　に　番　も　と　云　ハ　近　衛　の　中　に　結　番　す　る　を　云　也　ろ　う

外　を　も　上　と　云　て　長　日　に　番　す　る　近　衛　と　云　也　　完
それ　の　　その　の　や　我　子　ま　り　ふ　ま　を　ま　ら　う　を　ま　ハ　と　り　ま
も　む　　神　楽　其　の
も　井　と　め　て　殿　上　人　ま　と　の　通　京　酒　家　と　と　ま　也
ま　す　ー　ひ　　殿　上　と　ぬ　ま　と　同　や　う　ま　ま　ま　ら　ん　の　と　殿　上　思
ま　ま　ま　き　ま　ま　な　り
わ　ま　を　ま　れ　と　ま　ま　ー　し　ま　せ　と　殿　上　と　ま　一　と　ま　り　ま　と
れ　ま　め　せ　と　ま　ま　ま　り
り　ま　ま　　大　井　首　へ　也
殿　や　ま　と　ま　ー　　引　ひ　ま　ま　ま　人　と　殿　上　へ　ま　ま　ま　ー　ま　ー　ま　る　ま
せ　め　て　み　の　ま　ー　殿　上　み　ま　ま　ま　ま　て　ま　ま　ま　す　る　ま　と　成　へ　し

思ひすん思つゝひ　紫上のゆゑなくあつかはせ
給ふ　紫上の御子ゝなり
えらの子の　明石姫君三才也
次は蛭兒（ヒルコ）　三歳前腫物（ハレモノ）不吉　注也同事也
物縁親蛭子（ヒルコ）　かゝりをうつゝ思ふらんとも
せう成ぬ是こそすゝて
つゝる文さ海　かゝちも不法とかち
いとしあなけるほとけうさも　もきの事なるべし
おもちをすゝ乃ゝ　紫上の詞源氏ゆゑたてしとんをうゝ
思ふ心なるゝを見ふ狂ふ我をみしらるやうにあらん
やとてうゝ白ゆゑんまゝ心えうや

いとあなのらん　紫上乃御さるれに思ふ心あらんと
御ふを御ふく意
ちこう　双地
年乃わるゝを　七夕ゝを海見るれとも御ふのゆゑと也
漢ふゝ　ぬりのゝ　ゆゑの年ゝ　ゝゝそゝ一和
乃ゝ　花

清涼　十四　以前巻とをり

源氏物語の名をり次年杖を立てあり

うとぶらいうん事やあれ出なくてハ不濁(ニゴラス)名をいひ

なりつくるやう

うくるの中　ゆゑ上ひ中　明石と放(ケシテ)て中をなる所也

云も　源氏也　二条院へと思ふやう

つくる所　後撰十一ゆりうめなる所ゆけるゆふむの

りるとよきる男乃家ちくを所くひんるを所なれをむさ

しをあるなくくさらくぬとうへるれをふと

うをて給あれよみくさりられをゆ　者りをてまつふ

をつくをを所ゆれをつくきあれなくもあるれ

いうふいひての　撰選　恨ての始りく人乃つくうくを

いのに伊ひての者をもなくへき

かくくてのくをひるれ　ひんるを所とを中をふりとれり

めをなんを

ちう海きの事を　大略三支乃時を更但又歳以上例(ケイ)又

勿論(モチロン)元花山院を九歳(チヤウコ)無禅や元を喪(モギ)無のくとを元

さをかすくん　ゆゑ上ひ中に源氏ゆ氏あらんと者(ノ)子

くをりをを

中くうのやはくろひ　いのゆ紫上乃ほ子とりひふを

やを無変(ヘンシツ)ををあくをまんと也

くろやをう　源討

うしこそよ　殿上の法服(ホウフク)うしなはれ　宣子也
きん秋文　殿上女田戈　秋文女こ　一ちりひとをちくう
しろこあるとなり
けふのめしへ　ぬる上むか中　女氏殿上沖一方ゑ方ろ
定治(ジヂ)ろんとを思きさりゝ子源氏沖むもをのきち治子
をむ殺(サツ)大めてをゝとれよ百なり
よの法むよ　ゆよを嬪妃も殿上のまくゝ感治ろんとも
きりとなゝを　ほうあらんるゝもなり
何むなに　嬪妃のむるを対殿上へゆつゝんとのを素(ソ)也
をゝゝゝこそ　朱雀院を延喜第十一村上ハ十四中
文温子(ブンオンシ)昭宣(セウセン)ひのめ也　兄(ケイ)也　兄明第一親王なれを更衣腹人

后也　此例元亀の賢(ケン)世子宣旨なれともなり
るをれとろ約て　三条院に御対治(キヤク)ゆ大納言のめを左治
対贈太政大臣なり　なり約ひし例あるや
おさゝひのひるを　中腹(ハラ)おとろを蔵(クラ)人(ウド)腹のむ元あの
内ふもをと家頼とのむあるを
ゝ法へゆてりのゝ　法子乃るなり
思ひよりをふを　ぬる上乃ゆゝむ　むようをるて
ものも　殿上へわをへ元事とをひるをてもきのとて
ろをを弱ろふを
ひるに方よ　方ふをくをてをきいめゝと明る上乃思ふ
ゆろろや

日なとをらせ　二条院へ渡らるゝ姫君は　と撰
いみしくあやしう　はしたなくなりるゝ　とうや
はしたなくも　ぬる上もまらひあるゝんといとう
えをなく　明石上
きえぬへきうや　系世契のとなり
をねらもの　明石上乃拝
君のきゝ　明石上　又ゝく成ともはよらせとあのらと
はしてのあ　や
君ゝなきゝ　君かうえを　山なりやをたり孫のゝんん
とや　唐の石野乃山ゝもれともくまんとおりふ
我なくなくに　下白そ山ゝ乃むそよめり

連いを給　山詞面白　遠めと思故ゝ物ゝらふむり
の色たつを
いとひきえハ　ちゆくも源氏給しゝ物ゝの会ゝ
ゝゝとおもり
いとうゝ　姫君の源氏は君ゝ御産あるゝとは聞
のひなる色
山春ゝ物ゝを　生字をよめり
あまうえ　さけ尼の髪ゝ　や
山詞面白ゝなゝ　乃ゝゝ
よ所ゝ物ゝ　紫上の子ゝゝさん事ゝゝとゝ　ゝ上ゝゝ
色と思ゝや

何のかく　明石詞なりの可強方よ出生けりへあるもの
むや　の行ひあのをを　あのするむおりへまいう
一　歌をとまりの行をてひや　私よ　ひ行の行ひぬや
強て　音なくともあ為らめら可ふむなるへし
ふりのうしてきて　ぬる上　常をめひ端をかるをおゆく
思ふ為や　松風の寒けとうてけもくし為まくま
ろともみ見をとうの行へのしなをしうや
けをしとの行　姫君の抱の行ふ神なるる
来ら紙き　ぬる上　姫君の行るるを
けひ初しし　松風みあさき根さしと云こされるめひ
ようと行へ　院をを定ら　然めと嘆君となるへんや

されあるを　むとけりをもたへさりあれなるへし
めけとやね　一人のるや
行をうーあまりつ　行太刀をうて
尼宮　宮女代太刀事　を陽明門院ちはまる一代
の院まくけるしまをゆへるを
人たまひる　人給車　副車
ひりふつを　ぬる上　殿を道中ふる
西けもて　二条院にて西なるる
抱あひる　常上と源と宮やん　を参やんと源思る
ひりふりやをする　回しをを常上の行股めとけりひ
行へとは子のるけを思けをすと思ひ行ふや

ひやとき　紫上れひ可給う　流行ふとゝ人を
又ゐんゝとゝまゝ人のちあり　そんめはとなり
海つゝ行人ゆきゝゝと　明石姫ひかけて条しゝ女房共
人ゝの出入たゝきに沖もきの日も用うたりとを
なれとゝるを
たゝきゆひ　今世ニ知人る（頭必ルヒジ）事一丸
力のおこゝるを　ゆ（リヤウジヤウ）ゝ牧ゝ（ゝ）ゝ歌とゝ
ゝらうつひ（ゝ）の　尼君（アマキミ）ニ（イケン）見ゝとゝ中ゝ主のゝともなり
ゝふゝ丸ゝあひを　大井ゝゝゝ行ゝゝ京へ家と
も成ゝくまり
まゝとゝ　源のゝ中ゝ

年をゝるゝぬ　源氏物語一丸
七日ゝゝ孫こひ　系図七日ゝゝ上達部を七日迄
ゝゝ巻てゝ云象を
ゝのやう　殿上人や
東乃院ゝたゝ　花宴ゝ
ゝゝゝ　大井ゝ歌ゝゝゝ
ゝゝ乃ゝゝく　花宴ゝ男の袍を思ひて夜とゝゝたゝ
そゝも恨もせをして可給ひ（手）ゝ
ゝゝゝ　紫上ゝ乃ゝゝゝ
別帝　家司とゝ
ゝゝゝの沖ゝゝ　ゝ乃なゝゝゝゝ

撫人は言うり縁あり
さふ　簾乃かうなり
けひのあるりあん　僧乃樂は撫人乃言の詞　あすのあるる
あうそれらと成らうあとともいとめ　下略
舟とむる言　撫人うその舟と先とあり　上詞とう
をそや　せうと男とりてなるべし　源氏と明石上
乃とあらまんとや　まうと人をぬる石上とさきり
りてはそ言　あとも山孫あんを所くく人の詞や
さ孫あんそもやうれむ先もやく後と明石上隠むさて
振やもやうそく後らんとやにねを奏乃字
まうと人　明石上　ゆひかとろをゆるし給へる

いそやなと　萱上乃御腹とや　ぬる上の世れつねる
ととの所なれ　源乃法心中　明石へ道
もあるを見れむとくくもあるまゝ気とや明石へ道
の思うん所計をとそれもめ人々ゝ故立の色る給ふ
を心くれしきとうや又の後入道乃姫所ゝのなるとも
と思ふ所氏後可強先孫女のひの姫乃むを先なれとも
自為を上あるりのとるを
爰のわるる　世中ハ爰乃わるる先字指の行波り所く
姫とう思へ　引言うり不及爰先知ふ乃の色れむ
ちまるとなり
引をくゝ言中如氏をとれるというん用の

如是したれと云むりや
あくまでのる所 大のさなる所にて色和事りなとする事
卿(レウジ)ふもなるもしやも 弱(ヨワッ)きる所所よや
ちうそうて 濃(サガ)の所寺 撫(ケイキウイン)院なとの
心人是ふ所なる法なり
又いやしきりやうふ 男人是くらとそいてり法とす
さて又大ひとふもめされぬなり
ものくれ そなへての物ふあ〜ぬとつ云ることた
ふ事もきす甲(ヒケ)ものせをるもの及なくとする
〜あき 一位見分とや
さうひしの 明ふ人道世法ろむくとこきもの法と

人をとりてせさせて文とや 紫上へわたりたるとやて
胸(むな)にあれ又もきのうとくしくて玉(キヒツ)玉物をり
れ法さおとく 太政大臣 菱上 女乙
ちりてそり 殺仕れ男や
ちりの玉里 法(ホウ)道の玉(ヒツ)増なくる
あすのふ 氏子是(タキ)ちり 鶏(ケイコ)ちり 鶏(トウヒ)人
うの年 勘文(カモン)
内のれとく 源ハ天子の文として今なくなることとする
天文(テンモン)とを日月又星女八者(シヤウ)や 氣文とを風雨の氣又戒
みて吉凶(キツケウ)と起(サウ)するやをとれ事をも又一人の為ふ
くるなくひりや何なるぬ事とする

あるしをうとむ　世七戈　ぬれぬるしむ年ゝや

山伯頭はゝ憲を危みうり

令れかきり　落雲の沙心

くとく　切酒を名安りしをあるへし

いとよをけり　沙門へ仏給詞せや

沙門の沙月ゝいとまのく母文を見行へを

沙ゝしまを　勅言

まれくし　落雲れ沙不例乱雲内をなり

沙ゝをとゝり　沙初なゝし沙をあを沙門乃ゝれ

とろの殺沙へを

加きりあまを　約章還尚乃事やをよ沙ゝ沙在あり

る不穏なゝを

あゝとゝ事　源ゝの密通又悪乃姫の深ゝし事あゝ

上の爰乃ゝうに　源ゝ実父ゝくなゝし事をゝ

せや　度ゝ見や

ゝ沙　沙ゝへれ前ゝとあゝ沙ひ抜を密通るまゝるや

かゝうじ　中将云　相子を毒殺者冥衆　河

ゝゝゝれ抜ゝとみゝを　時

院の　右院乃沙遺言ゆへ命今ゝ抜人あゝをゝ心ゝを

祝言ゝ思ゝ

沙ゝへ　源

とり火ゝの　如燈盞灯滅　沙華経　ゝゝくし　源討

家とはいふまでもなきなれども
りこそ　さもあり　めり　遊行　法華　とこたはれる
のうち　豪家　又　平人　卿　謂豪　又　高家
きくもしるかりて　仏法道　ものゝ　夢　あるべし
殿上人　天下　孫　雲
ゝはりの　絵　乃　人の　撥　しひあるべし
ゝるまき墨染　さけ
山きゝの　撥　流乃　撥　山　とゝ　ものゝ　ゝ　いとり
八日　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　私可　濁　相　ゝ　池
乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ぬう　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

左入道の　乃　母　后　撥　ゝ　帝　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

仏てんれいの事　御事と仏事　せわさと申く奏するよや
ワが子　子子とさせる
ことくへおかせ　源ちう沙汰事　仕給しや
とはちり　勅定もなるべきなり
てんをん　しけ氣　大変ちうとうや
やれむくひ　必報道りのとや
おりひろへ　寄りて　老僧のひとりかみ　りとも
ひとりの
それ日　桃園式ず　源氏の御文
一　檳榔院の文
世をけきめる　勅言

さうき世　荒湯屋　水大界之素　家成玉之雇
雑迅風之変　迅風　内ひ具　時風
雑と家屋と　祭時の　あへ　ぜへ　来しや　牡と云
ひとりのみの
延喜聖代　賞罰　遷事　以下先　和漢之跡不可勝計
を後あり　歴代　不思議なくあるとなり
ぜさは伊ゝや　双北
つ孫ちも　法門　ゆく　安や
町あれ　源氏　所詮　しと　ちなるへし
法ぜくちん　鶴林　弘法　人在今不通馬半錦裾
人学ぶれて　当今の　別なくして　半ふ錦なとき

わるあくしるるを云く
を後あり　まゝ　秦始皇莊襄王乃子として位の即とゝ
ゝ　ゝを実を始皇乃母乃大后嫪毐号不韋と云号下ろし密
通して太子を産史記
嫪あい一人号ふい一人嫪を生ハらせるるを号ふ
いゝ　淫慾むつのしく心てきうあいゆつりるゝ
さて襄王ゝあるせゝるゝと云く
賢中　家元宣帝者賢寵琅琊小史牛金通而生賢
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

なんとるまま　数多可笑也

うさをけうれ拙ふ　源の秋好をや

れまんをんさい　源八はかるとの系載（ビンサイ）るや

女御の　源八はかるを御ふなり

おひえ女院又武尹つ、文の御たなめう源氏れめ御人里

世中はたものしき　女院の為れ御恋と文ようと御書てや

念珠引のくく　旨を信仕（ブッシ）をかくきり

ひもとれ（古今）百ちの花れひもとく秋の野うなりひたて

まん人かとるめう

かくまはとうや　いかへ乃むものしと紙いとをも

くかくまは神う参あかりけり　小町

えたてまつらん　秋文（サイタン）と源いまうん御たるあるあ

とかうと　源は詩

さえまきき　ものなうらうれ紙あるまきまにりとや

七一を　文也所の事うりや

のうまてを　文を所れは遺言（イジン）よ秋文のるまを御とり

ものとまのをまを御祝是あるんとなりふう

なくさむとなり

もをし　むをりて連も悪し　種といのくせん恋ふ

うをよなうを契を

むをりて連御是所れなりひの事うや

今ひとりを　満雲れは事れ

中比 源ノのるや也
東乃ゐんか 花園 東の院にうつし給ひしこと 家
うて書ものしられしくはへむ 義うむ
わ遠も人を 自他心あなり
左の尼り 天子は御涙をとも
たりめうこう ひかりさうそを人の恨をはかりとなり
なりひたのひさる めむうしろをやしも大かとか
らぬと思ひたりのめり 源人を
さりやあかむうと 左注同むとて 宮はれうう源人を
おさけれ人 明石姫君也
ひかと 千乙高門 千乙 東源人也

民をもとくむを 源ふうり後 駒馬高蓋 碁は 碁定
國字を 舅信家乃門の 彼 ゐるとを 文子 ゐくろひをとは門
さひろうるを 猟司 ゐてとは 城 ゐ源 後 の
子孫家とれうひとしてる左一也 果しをを子 史
大夫成をひを 秋好は 葉 明石姫君 中文ゐを也
一門 盤島の事 を 源人を
ゐ 源きて 史人てを
うくしさ 歴 なるをとてなり
年はうの 行かを 六条院 可給造の 沙汰也
を 源ゐ人 晉 右 季 倫 右 金谷春 充 満 林 作 又十四之
錦障遇春不 遊 樂 恩 色 充 人 鄭 天

石ずうん奏くるりのまく錦の障子をたて花を植て池
に鑑を嶺と崩せしりのるを
なまと　春をゝゝ花乃ひとゝ人ゝ咲ぬゝ梅の香を秋そ
まされる　花を秋の花とゝ分るゝゝや
万葉集一云　大漢文注云　大唐に教恩寺
鏡春山万花之艶秋山千草之紅対額田王に秋判之事
いつまをぬくくに　秋詩　劉禹錦
自古逢秋悲寂寞我言秋日勝春朝
大ゝゝ乃秋よりもをゝをしと花みる時をりつれ
あゝ　ぬくあるゝ　又うれ
文ゝも書ゝも　花の文歌も秋ゝもゝゝゝ梅ゝ

秋為をゝすゝらゝを
あゝゝゝきゝし　いつとても恋ゝゝゝとゝあゝ孫と
も秋乃夕をあゝゝうるゝり
は詞殊勝ゝゝ毋ゝゝを所事みゝをて書へのゝき所
と花紅やは色不秋なく成ひしなゝて
恋をゝゝ　ゝゝゝや　源も秋と色分思ふと讀ゝ人を
梅ふのう　源氏物やうれと故文ゝのゝくゝゝき
るゝ秋はゝゝゝ人ゝを
やゝゝゝく　をうくゝゝく
ほゝゝふゝゝゝき　源氏ゝ浅ゝ出ゝゝとや玉美好文
の人をのうをるをとゝうや

つゝのうちんそこらつゝのうちんへのるまゝつゝ
をそつゝをそしたゝをそしたゝをそれとしらをん
はをと称　苗　結文苗　帽段
柳は枝よ　梅のしゝと掛乃元にまかせて柳乃枝ふたの
せてうれ　源氏物語事不足事とする
あまをいとよあうれとや　秋好薄雲とかりしくうへ
てもれそうはたを薄雲を勝れやも年月のきはゝ
つまやなりゝ
れをの道を　もや年月を思惟も出来うゆへ和
歌あしゝとなり
めはい　秋乃色と知うれふれはしとくやしくれり

ゝてふやまゝくはうへとなり
はやのゝ　源氏秋好とゝいよくゝ面むき後ろ行へを
春は暖ふ　まへ嵯上むきあはふ事みゝを今書出をり
世政は　姫さゝうゝぬとや　山ふともありけ
れを嵯上のはひさをを思ひてふやめはあるハ
六条院乃あゝまなり
世中をあらきなゝうゝと思ひをる事き　白
文まて明石上心中とやはは仮名ゝ紙しを
ゝなとのゝを行へ文白　源氏又はむ中や
あゝりをくゝ文　ひと可分
れゝ寄なくき　なりひあうゝと思ふや

而のさま　大かたの人々まてもあくかの海井のみし
かくこそ　いと姫のらはゆらんさむの宮へて
可見心ちすらく自地思心や
中くまて　心れ而白元　契乃絶となり
あらんかの　姫宮の御へ
かくれひさ井　明石のくれ事をる
いさりせ一新方　而白帝とや　我方の要事　忘たひ
きさるとや　船舟のりて雲の求食　まりあり
八月末まても船あ所へ　雲し
なりひしう　波不　的石うとる
あさりぬの　かくて史乃新となる方の俗しをはり

れくはゆるなりうり
うをそはるる而白詞とや源氏なりひのみつきとは
石ハ不云して　かくて史をあれうも舟なとよあるなり
定心ハ明石上と思ふふとあるあれむなる者
れうき物と　うちの面しなもてをうれし世中
と絶きりのとしうせ初うん
ぬ石上と源乃猥ふふむや
たうとの事やも　源氏　元ね
なりひきれうきとなり

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用